

地域社会・家庭・学校における読み聞かせ運動について

—東京都大田区大森地区を中心にして—

有働 玲子

1. 研究目的

読み聞かせ運動に求められる複眼的な価値とは何かを明らかにし、読み聞かせ運動は、地域社会・家庭・学校のなかでどのような実態として現れているのかを事例をもとに考察する。特に、東京都大田区の地域社会・家庭・学校における読み聞かせ運動の展望に結びつけることを目的とする。

2. 読み聞かせ運動

2-1 読み聞かせ

読み聞かせの表記は、さまざまにある。読みかたとその中身を厳密にみると、それぞれの運動体により異なりが生じ、揺れがみられる。たとえば、「読み聞かせ」「読みきかせ」「よみ聞かせ」「よみきかせ」などである。また、「読み語り」「語り読み」などといった、語り文化の系譜を踏まえたものもある¹⁾。等を基にして論者なりにまとめた。当然、それぞれに主張があり根拠があり、その意味を本来は吟味すべきであろう。しかし、本論は運動体の吟味は目的ではない。そこで、本論では聞き手に対して絵本や本を読んで聞かせる行為を「読み聞かせ」と定義し、話をすすめたい。さらにその内容については以下のように捉えることとする。聞き手は乳幼児から児童までとする。話し手は児童から老若男女を問わず、巧拙をも問わない。実際に行なう場所は家庭文庫、地域集会所、児童館、学童館、公共図書館、幼稚園、保育園、学校、等々聞き手の集まる場所の全て。手法はそれぞれの読み手が得意とする読み方。具体的には、素読み、パソコンを用いた映像を映写しての読み、人形を用いた読み、参加型の劇遊びの読み、クイズを取り入れたゲーム形式の読み、パネルを用いた読み、ペーパーサートを用いた読み、等も含む多様なものである。

こういった方面の先行研究として、足立幸子は全国的な読み聞かせ状況に対して、行政がNPOも含めた生涯学習の運動、市民参加の運動の必要性を説いている²⁾。ただしそ

の具体的な展望までは示されてはいない。しかし、一人の子どもの成長を考えれば、地域社会と家庭及び学校とが、連携していくことは望ましいはずであろう。また、地域に根ざした文化活動として日本の読み聞かせは長い歴史を持っていることを忘れてはならない。

そこで、本論では、東京都大田区を考察する。同区は歌舞伎の舞台にも描かれる古さから、近年は先端をいくIT関連企業という新しさまで多様な顔を持っている。何よりも23区の中で一番大きい区である。

2-2 読み聞かせ運動と行政

東京都の読書活動推進計画は平成15年度より5年計画が予定されている。2000年OECDによる児童の読書調査などを基にして、具体的な推進計画を公開している。読書指導や読書推進運動という文言にて、地域社会、家庭、学校についての提言が示されている。これらを指針として、受け止め、それぞれに該当する場を考察の対象に選定してみたい。

特に、事例を、家庭支援センターの支援員、地域の保護者による小学校での読み聞かせ運動、地域の児童書専門店などにしほり、問題を考察していく。

3. 東京都大田区の読み聞かせ運動

3-1 家庭支援センターの存在

大田区には平成14年に洗足池と、平成16年蒲田の2つに、家庭支援センターが完成した。子育てハンドブックの配布から子育ての相談、交流の場に提供されている。このセンターのスタッフが大田区の子育て機関紙『smile』を発行している。その創刊号で、まさに絵本で読み聞かせが特集されていた。編集の中心となっている當間紀子さんは、プロの編集者の顔を持ち、地域の子育て活動を展開している。機関紙の編集の斬新さは、取材の確かさに裏打ちされている。この地域に転勤で初めて来た家族がすぐに利用できる

ハンドブックのような機関紙なのである。写真をふんだんに用い、しかもそれぞれの利用連絡先が明記されている。當間さんの取材活動力、は情報収束力でもある。以下、當間さん自身に現状を語っていただいた。それが次の手記である。

3-2 絵本を介した幸福な出会いと支えあい—その影に見える実像 當間紀子

読み聞かせ活動が続いている人々に取材をすると、絵本そのものとの出会い以上に、絵本を介して出会った仲間や聞き手との交流が何よりもかけがえのない存在になっていると感じる。聞き手との出会いを繰り返すうちに広がる新たな活動。活動の原動力となるのも仲間や聞き手との出会いである。これらは、絵本がコミュニケーションツールとしていかに秀でていたかを示している。

多くの人々が語る絵本を介した幸福な出会いとは裏腹に、これらを巡る環境は明るいとは言えないのが、大田区の現状である。

大田区では平成16年度から4月1日以降に生まれた子どもに向けて絵本を配布する事業を始めた。布製のバッグに7、8カ月児向けと2歳児向けの絵本2冊と絵本選びの参考となるリーフレット、区立図書館の貸出カードの申請書が入り、新生児に郵送で配付していた写真アルバムを絵本セットに代えたものである。正規のブック・スタート事業のセットではない。

絵本配布の場所として選ばれたのは、生後3、4カ月児対象の乳児検診。区内の出生数は年間7,000人。毎月4カ所で行なわれる乳児検診へは、毎回それぞれ100組近くの親子が訪れる。その数の多さゆえに、ブック・トークや読み聞かせの実施を見合わせるようになった。絵本配布のフォローとして東地域行政センター地域健康課が考えたのが、7、8カ月児と1歳3カ月児に向けて実施される育児教室の計画に、読み聞かせを加えることだった。

幸い、この地域には地元の図書館、小学校、児童館を中心に活動している絵本の読み聞かせグループ「たんぼの会」があった。8年前に地元の小学校に働きかけて小学校での読み聞かせを始めた。小学校で45分授業を月に一度引き受けているほか、図書館では乳幼児への読み聞かせ経験もある。大田区子育て支援関連部署からの「もし、大田区でブック・スタート事業が始まったら、何人ぐらいの人が手を貸してくれるか」という打診に具体的な数字で返答できた団体である。早速アイデアが練られ、8月の育児教室から読み聞かせを始めた。

昨年度、財政削減に伴う民営化を予定している図書館3

館で、読み聞かせボランティア養成講座が実施された。この地域の図書館でも実施され、受講後に「たんぼの会」に参加した人もいた。講座受講者の受け皿として、この図書館ではお話ボランティア登録を始めた。「たんぼの会」メンバーもお話ボランティアに改めて登録し、図書館でのお話会の中心的役割を担っている。育児教室でも実際に読んだ本以外にも数冊を図書館から借りて持参、紹介した。今後はメンバー以外でお話ボランティア登録をしている人にも、手遊びなどで協力してもらおう予定だという。地域で活動するさまざまな才能が手をつなぎ、絵本を介した親子支援を行なう体制ができつつある。

他の地域にも、図書館がまだ数少なかった20数年前から活動をしている文庫連絡会のメンバーや、絵本の研究グループ、区主催の朗読講座受講メンバーで発足、朗読実践で受賞経験もあるグループ、手作り絵本のグループなど、絵本と読み聞かせに関係する活動団体は多い。そんなところからも、文庫連のメンバーに依頼してお話を始めた地域行政センターや、同様の機会を検討している地域もある。

継続的な活動を実施しているグループだけでなく、現在小学校で、保護者による活動が増えている。本選びや読み聞かせスキルの向上には、既存の読み聞かせ団体や図書館などのサポートを得ているところが多い。図書館のボランティア養成講座も人材養成に一役買っているほか、区内には絵本講座やお話会などを積極的に行なっている絵本専門店が2軒あり、これらも活動を支えている。

大田区内のある小学校では、クラスを支えるために、保護者が何ができるのかを考えたという。その結果、担任教師の勧めもあり、持ち回りで絵本の読み聞かせをすることに決めた。週2回、始業前の15分間を「本読みの会」に充てる。始めるにあたり「うるさくしても注意しない。教え込まない。きちんと聞いているかどうか確認しない。」と決めた。

初めは、きちんと聞けない子どもが何人かいた。しかし、しばらくすると一番熱心な聞き手になり、その頃からクラスが落ち着き始めた。学年が変わっても、「本読みの会」をやめようという声は上がらなかった。

始まりは小学2年生の2学期。担任教師や近隣の図書館に何度も相談をし、読む本を決めた。限られた時間内にきちんと読み終えたいと、ストップウォッチ片手に下読みをした。大勢の子ども相手に本を読むのは誰もが初めてだったため、本番で声が出るのかどうかも不安だったそうである。毎回絵本を2冊から3冊読んでいた。4年生頃には主だった絵本はほとんど読み尽くし、児童文学へと移った。5

年生になると長篇に取り組むことになり、1冊を1学期、時には2学期かけて読了するようになった。単行本に移った後も、候補が決まると読み手は順番に本を回し読んだ。

取材当時、該当児童は6年生になっていた。始業前、読み手が現れると、子どもたちは各々の席につく。本が読み始められるや教室内のおしゃべりは止み、どの子も声に耳を傾ける。5分も経つと教室は読み手の声に集中し、最後まで途切れることはなかった。

卒業までの4年半、この学年のすべての保護者が何らかの形で「本読みの会」に関わった。「子どもたちと深く関わりあえて幸せだった」「子どもと一緒に私たちが学校を卒業する気分」と、誰もが振り返る。自分たちのところへ、入れ代わり立ち代わり本を読みに来て来る保護者達の姿から、子どもたちも、おとなたちが自分たちに寄せる思いを感じながら過ごしてきたことだろう。絵本を介して培われたかけがえのない時間と思いがある。

高学年まで続けるケースは、まだ少ない。紹介したケースも小学校卒業と共に活動を終了した。先に紹介した「たんぼほの会」も、依頼は幼児及び小学校低学年を対象とするものが多いそうである。長年中学校向けの朗読の機会を伺っているが、未だ依頼は来ないと嘆く団体もある。「読み聞かせ」という言葉が絵本とセットでイメージされやすく、年少向けの取り組みと受け取られがちだからだろうか。今後の調査を必要としよう。

公立学校の図書室は利用時間が短いだけでなく、蔵書内容も充分とは言えない。こうした課題を抱えながらも、今年度から大田区立中学校では始業前の5分間に生徒全員に読書をさせる「朝読書」を始めた。

3-3 東京都大田区小学校の読み聞かせ運動—現代の親子読書

3-3-1 大田区の小学校の親子読書の原型

実は、昭和20年代より大田区の小学校のいくつかには、保護者のPTA活動として読書会があった。その延長から児童の読み聞かせ会を保護者と教師が土曜日の午後を実施している小学校があった。後に、幾つかの学校では文庫が小学校の中に置かれた。大田区立蓮沼小学校においては、「ツバメ文庫」としてはじまり、現在も続いている。その歴史と内容の広さから、代表的な文庫である。

小学校では、昭和の30年代から学級文庫活動が盛んになっていく。読書感想文集から、作文集、演劇大会なども熱心であった。学校の教師がそういった活動に熱心であったことが、多くの活動を生んだ。幾時代を経て現在は、数校が各学校独自の読み聞かせをPTA有志などによって実施

している。

また、本を中心とした親子文化活動に変容した文庫もある。大田区立徳持小学校の例である。ここでは、月の第三土曜日に、図書室や集会室で読書会が開催されている。季節の行事もとりにいられ、折り紙や手遊び等の活動になっている。有志による活動であり、参加費用もわずかではあるが、負担をさせている。

一方、大田区の中学校では、2004年4月より、一斉に朝の読書を実施するようになる。理由としては中学校の図書室は生活指導の問題が多い。専門の司書もない。そのため、利用しにくい場所になっている。将来は地域の公共図書館と手を結び、ヤングアダルトの活動が熱心な目黒区や葛飾区のような諸活動を活発化していく事も考えられる。

ところが、一斉の指導は個別の対応が必要だ。朝の読書の本を大田区立安方中学校では地域の住民にも回覧を回して呼びかけ、不要になった本の寄付を募った。教育的な意義と物理的な保障は今後どのような形になっていくのだろうか。

小学校に比べて中学校はこれからの活動となろう。そこで、先の家庭支援センター當麻紀子さんの報告にあった小学校の事例をまず詳しく見ていく。学校と保護者が手を結び、朝の読み聞かせをおこなっている小学校の事例の概要を明らかにする。ちなみに、保護者の中でもこういった地域の読み聞かせや文庫の活動に従事されている方も多くいる。代表的な歴史的に長い会を以下に掲げたい。

だんご虫おはなしの会	第1. 3月曜午前10時から12時 活動は馬込文化センター
MOMOの会	第4木曜日午前10時から12時 池上文化センター
たんぼほの会	第4水曜日午前10時から12時 羽田図書館
絵本を楽しむ会	第3火曜日午後6時30分から8時30分 生活センター
星の子・おはなしかい	第2土曜日午前10時20分から11時 石川町文化センター
わらべうた・おはなしかい	第1水曜日午前10時30分から 石川町文化センター

3-3-2 大田区立矢口西小学校の朝の本読み—保護者による週二回のボランティア活動

○読み聞かせの方法の特色

区内60校余りの小学校の規模では、中規模の小学校になる。地域活動も熱心で地域新聞の発行もある。特に、現

在の六年生の保護者は、小学校の二年生の時より保護者による読み聞かせを「五年間」も継続している。学校の行事と見合わせて行ない、無理をしない緩やかさを持っている。読み手は全てその学年の保護者の希望を募っているのである。ノートを記録して、そのノートを渡す形で次の読み手に行きわたるようになっていく。取材には、現在のPTAの会長宮田さん、副会長大塚さん、六年生の高橋さんが取材に応じてくださる。以下、具体的な内容を述べたい。本は、クラスごとに読み手に任されている。

この活動の中での児童の変容をまとめると三つになる。

1. こういった、良く見知っている保護者が何年間も読み続けることで、児童の中にも読み手の声に耳を澄ます姿勢が自然に育成されてきている。継続する効果は高い。
2. 話しの楽しさをクラス全員で共有できるため、社会的な読書に結び付く契機を作ることが出来ている。
3. 聞く形態を工夫できる。それぞれの実態に応じて、聞き方を育てることができる。

活動は原則として、火曜日と金曜日の一週間に二回の「朝の時間の8時30分から15分間」である。読み手は、年度の初めに募集をする。全て、保護者のボランティア活動ということを説明する。読む本や内容が重複しないように、前回との引継ぎを記録するノートを記入する。このノートがこの会の一番のながい歴史を物語っている。

○保護者の意識

では、なぜこの活動が行なわれるようになったのであろうか。契機は、保護者が多くの児童の実態を知ることへの思いとあったことにある。教育的には、読書を媒体にして児童に社会との結びつきをねらうことである。特に、自分の子どもに対して読み聞かせをするように、クラスに読み聞かせをして、多くの子どもとの朝の触れ合い活動を保護者が作り出したのである。

保護者自身は、本を仲立ちとして地域社会を代表する学級外の他者の存在である。そういった保護者が入れ替わり、日常的に児童に関わる教育的な効果がここにはあった。つまり、多くの児童の朝の実態が明らかになる。これにより、教師と保護者との連携が図れた。聞き手の児童にとっても、地域の保護者との関係性を緊密に結ぶことができた。

良く見知った保護者の方が肉声で読んでくださったことは、何者にもかえがたい。親和的な雰囲気の中で、朝の安堵を子どもは感じる事ができた。と同時に親和的な声を聞く事に喜びがあることを知ったのである。六年生は、大きな成長を遂げていった。何と、2004年2月には、『杉原地畝物語』(1996. 金の星社・杉原幸子&杉原弘樹)を読み

終わっていた。二学期のあいだ、ずっと継続しての読み聞かせの成果であったという。

○ある日の一声の宅急便

論者がうかがったのは、三月であった。そのため、長編がおわり、読みきりの民話を読み聞かせしていた。当日の様子は次のようである。

保護者である読み手が教室に入ると、椅子が既に用意されている。児童は、「今日は本読みの日だ」と声を掛け合せて、教室に自主的に入ってくる。読み手が声をかけて読み始めると思い思いのスタイルで、教室の自分の椅子に腰をかけて耳を傾けているのである。15分間読み続けて、本を閉じると、教室のだれかれとなく、拍手が起こる。そこで、本読みは終了する。読み手の保護者はそれぞれの、職場や家庭や地域へと、帰っていく。まさに、朝のわずかな時間を、本を仲立ちして共有している。ノートには、今日の様子が簡単に記され、次の読み手に子どもを介してまわっていく。ゆったりとした時間であった。

約束事。今までは大まかな原則を緩やかに守って行なっているとのことである。

1. 教え込むことをしないようにしていく事。
2. うるさい時があっても、どうしてもとって強制していかない。(外に出てしまう時もあったそうである。)
3. 聞いているのかどうか、態度や内容に関しての確認をあまりしていかない。
4. 時間で開始して、時間で終了していくことを守っていくようにする事。
5. クラスごとに読む本を別にできる。それぞれの状態によって絵本や本の選定を決めていく事。

できる人ができる範囲で参加することが、この活動の特徴である。また、そういったシンプルな形であるから、継続が可能であったといえよう。では、他の学年の取り組みはどのようなのであろうか。資料をお借りすることができた。現在は、2年生も、3年生も、保護者が呼びかける形で読み手を募集して、継続している。やりたいと言う声があった学年の読みたい保護者が、本読みに参加している。

○どのような本を二年生は読んでいるのか。

小学校の二年のあるクラスと三年の本のリストを一例を次に紹介したい。それぞれクラスの様子、反応、クイズなどの数行の記録が記されている。

- 5月13日『おばあさんのスプーン』(神沢利子作)手遊び「はちべえさんとじゅうべいさん」をしてから本読みを開始。
- 5月20日『きよだいなきよだいな』(長谷川摂子作)
- 5月27日『おつかい』(さとうわきこ作)『かもとりごんべい』

(日本昔話)

6月10日『シナの5にんきょうだい』(クレールビショップ文)

6月17日『めっきらもっきらどおーんどん』(長谷川撰子作)

6月27日『せんたくかあちゃん』(さとうわきこ作)『すてきな三にんぐみ』(トミーアングラー作)

7月1日『からすのパンやさん』(かこさとし)

7月8日『ぼくのだ!わたしのよ!』レオ・レオーニ『ペレのあたらしいふく』ベスコス

10月7日『おおきなおおきなおいも』赤羽末吉

10月1日『ひさの星』斉藤隆介

10月28日『ごろごろドンドンパラパ』にしまきかやこ『ぐるんぱのようちえん』西田みなみ

11月11日『てんさらばさらてんさらばさら』わたりむつき

12月2日『地雷でなく花をください』柳瀬房子『サンタクロースってほんとにいるの?』てるおかいつこ

12月9日『おみせやさん』角野栄子『防犯対策の紙芝居』

12月6日『バスター』リンダ・ジェニングズ

1月20日『ビリーは12さい』相馬公平『さむがりやのゆきだるま』やべみつなり『どくのはいったかめ』多田ひろも紙芝居

1月27日『はなたれごぞうさま』太田大八『ベルナの目はななえさんの目』郡司ななえ&織茂恭子

2月3日『あたまにかきの木』小沢正『ぎょうじのゆらいー節分について』

2月17日『かっぱのすもう』小沢正

2月24日『おかあさんの紙びな』長崎源之助『きょうりゅうのたまご』なかがわちひろ

3月9日『かめがカメになったわけ』ヤン・モーエセン『くものすおやぶんとりものちょう』秋山あゆ子

以上より、児童の教養を涵養するための読み聞かせ活動には、読み手の読むことの楽しさも、共有されていることがわかる。読み手が聞き手に肉声で声を届けることにこそ、一番の教育の価値がある。ここを基礎として、選書活動があり、児童との結びつきが生まれるのである。読むことの楽しさを知っている保護者が、児童にそれを、日常生活の中で継承させる。いわば、声の宅急便なのである。

4. 地域の児童書専門店—情報の発信と毎月の読み聞かせの場—

4-1 児童書専門店連絡会。

その加盟店は関東では7店舗である。神奈川県平塚市にある、「アリスの部屋」。千葉県千葉市の「会留府」。館山市の「グリム」。東京都には、国立市「桃太郎」。三鷹市の

「りとる」。「プーの森」。そして、大田区久が原にある「ティール・グリーン」である。この協会の基本となる考え方は、協会の作成したリストに掲げられたアリスの部屋代表である小林重晴氏の言葉に示されよう。

私たちは子どもたちの健やかな成長を願っています。それは安定した生活と、心の栄養である文字や絵にふれることが大切なことはいまでもありません。そして、幼い子どもたちにとって両親や身近な大人たちが読んでやることがなによりも必要なことと考えています。

児童書専門店連絡会では、このすばらしい世界、本との出会いのお手伝いをしたいと、このリストを作りました。また、各店では読書相談もお受けします。さあ!どんな楽しい世界が待っているのでしょうか。どうぞお入り下さい。

このような「出会いの場」を提供するものとして、児童書専門店連絡会はある。その精神に則り、「ティール・グリーン」があるといつても良いだろう。何よりこの児童書専門店は、専門誌にことごとく取り上げられている。

国内では、作家である落合恵子が運営するクレヨンハウスが著名である。児童に関する雑誌をも発行している数少ない書店である。また、独自の講座を企画し続け、常に児童の視点を重視し、情報を発している。時事的な問題を掘り下げて、全国的な活動の展開をしている。こういった児童書専門店の特徴をまとめると次のようになる(論者による)。

1. 本に精通した店員が、来店者に適した読書支援ができる。テーマや領域に応じた個別の対応をきめ細やかにこなせる。
2. 読書を推進するような、企画講座を実施している。作者のサイン会・絵本の原画展・玩具のキット講習会。

「ティール・グリーン」ももちろんこの特徴を持っている。

4-2 「ティール・グリーン」

大田区のほぼ中央に位置する南久が原に居を構えて7年。小学校の正面玄関前に児童書・絵本の専門店がある。その店の名前は「ティール・グリーン」。会社組織。店長の小林優子さんは、本職はプロのイラストレーターである。絵を描く時に資料として海外の絵本を見はじめたとのことである。この店の特色は3点ある。

第1は、お店のしつらえに関するこだわりである。

それはお店の本棚が木材、間接照明の形態、床板や、小さいなすわり椅子など、すべてに対するしつらえのこだわりである。開店するに際してイギリスのロンドンの書店を視察及び見学に行かれ、店のイメージを詳細に作り、自らお店の照明から、床の木から、壁の土から全ての詳細は指示をされて作られた。このお店は「ティール・グリーン」という。コガモと言う意味をこめられているそうである。まさに、児童に幸せを運ぶお店なのである。古木が見事に配されている。椅子は、子どもが座れる小さな木のものである。店長さんが一人で、ぐるりとお店を見渡せるような規模を維持されている。

第2は、絵本や児童書の質の豊かさである。店長小林さんは、ほぼ全ての本に目を通してからお店に入れる本を選定しているとのことであった。その規準を通過したものだけが、配置されている。店長さんが本の良さをわかっているので来店者は希望する本を必ず手に入れることができる。扱う対象の本は、絵本から、児童書、紙芝居、ヤングアダルトの範囲にいたるまで幅広い。直に手に取ることができるのである。流通機構に乗りにくい、個性的な書店の絵本も、選書の上で取り扱っている。質の豊かさとは、本の内容とデザインの両方の選択肢を持つ店長の存在そのものである。雑誌や新聞によって数多く紹介されているのも、当然であろう。

第3は、交流の場になっている点である。その場によって、多くの交流の出会いが生まれている。それは、文庫活動家から、読み聞かせ家から、保育者からイラストレーターまでの他業種を含む者が、児童の文化の情報を共有する場になっている。言い換えるとそれぞれの、団体や企画の内容を示す「情報発信の場」となっているのである。

たとえば、情報誌の展示である。また、会合のお知らせである。さらに、社会教育団体のレベルのものから、NPOの組織から、ジャンルを問わず、掲示板が利用できるようになっている。同店の存在が、読み聞かせ運動の複眼性を持ち、交流の場を提供しているのである。地域社会と家庭と学校とが、交流する場なのである。

4-3 「ティール・グリーン」の歴史

1997年3月27日木曜日に、東京都大田区久が原2-16-16、東調布第三小学校の前に開店した。

その春に、絵本の講座を開く。講師は絵本を購入していた、読みきかせの会、MOMOの会の会員である。この会は、この本好きの会の支部をかねている。以後、この会に参加している会員達が、同店と深く関わるのである。現在

は毎週水曜日の午後、同店の機関誌を発行する手伝い等を行なっているのである。

以上のように、本を媒体とした、情報の交流の場に、「ティール・グリーン」は変貌をとげていく。特に、同店が大きく取り上げられる契機になったのは、開店から、五年目になり、連続の絵本の講座を開くことになった年である。幅広い客層を広げる契機となった。

講座は、川西英沙氏を講師として招いたことにはじまる。全部で五回の講座を開催した。講座本は川西氏の『絵本のちから』である。また、話し合いの場を参加者のために提供した。結果として、活動家同士の交流が生まれたのである。また、通信『こがも倶楽部』の存在は会員を結びつける。なお、同店では実に贅沢な講師を時に応じて店に招いている³⁾。

4-4 「ティール・グリーン」店の企画

2002年には、『ほくたちの村』の小林豊氏のお話と講演。2003年2月は、ヒロコ・ムトー氏の『野良猫ムーチョ』などのお話サイン会がおこなわれた。

2004年新進気鋭の若手作家たちを招く。中村公子姉妹作家の絵画展と陶器点を同店で開催した。絵本作家のどいかや氏のサイン会を3月27日に実施した。2004年10月には酒井駒子氏の原画展の展示を実施。あまんきみこ氏と一緒にサイン入り絵本を販売。

こういった企画もの以外に、開店当時から、月例のお話は毎月一回実施されている。幼児のためのおもちゃ作りも開催している。また、五味太郎の会に参加して協賛している。以上のように、地域との交流から読者の交流にいたるまで、ここでは当然のようになされているのである。近年は、この店の魅力に惹かれ、数多くの雑誌はもちろん、大田区の広報誌、「まち活」、家庭支援センター広報誌「スマイル」にも活動の様子が採り上げられている。

5. 大田区の小学校による読み聞かせ環境

HPに掲載している小学校の殆どは図書館での読み聞かせを保護者の手を借りているところが多い。専門の司書が置けない、アルバイトすら雇用できない大田区は世田谷区等と比較して学校の読み聞かせ環境を作りにくい状況にあるのかもしれない。しかし、区独自の研究予算を獲得した小学校は、モデル図書室を作っている。たとえば、大田区立久が原小学校である。ここは、なんとカウンターが公共図書館の廃物利用であるという。実に入り口に見事な貸し出しカウンターがある。

図書館全体が、オープンルームであるため、ひろびろと

している。さらに、床と書架が木材で出来ており、部屋に入るとホッと落ち着いた気持ちになるのは不思議である。書架は壁に据付。絵本のコーナーは絨毯も敷いてある。二面がガラス窓に面しており、光を取り入れやすく、明るい。児童の閲覧をする机もいすも全て、特別な木材である。

本は今年からバーコード化されている。隣が図書準備室であり、パソコン室にも通じている。もちろん教師による読み聞かせも実施されている。

さらに、大田区松仙小学校でも教師の読み聞かせが実施されていることが、HPよりわかる。学校の内部の現状に関しては今後はアンケートなどによって、明らかにしていく必要があるだろう。何よりも児童が一番多くの時間を仲間と過ごす場であるからだ。

6. 大田区の読み聞かせ運動の展望

今回の事例では、公共図書館と学校との関わりなどには、殆ど触れることができなかった。明らかになったのは、地域の方が児童との触れ合いを求めて、積極的に学校に関わる事を継続しているかどうか、読み聞かせ運動の展望にそのまま結びつくということである。

2003年は、公共図書館において、読み聞かせ支援のための講座が3箇所で開催されている。又、この講座の受講生が、公共図書館や学校で読み聞かせを推進することを明記して講座を開催している。

一方、公立の小・中学校がどのような状態にあるのか。学校5日制の中で読み聞かせが朝の読書という、生活指導の側面を伴って指導されていくのか、そのあたりは、定かではない。今後は、集団貸し出しをする小学校と公共図書館との関わりを調べる必要がある。さらに、これらの事例の考察より、アンケートを実施し、実態を解明していきたい。

それらを踏まえ、先駆的な実践を実施している地域にも同様に取材及び調査をお願いして、読み聞かせ運動の展望を明確にしたい。

註

- 1) 『読み聞かせのすすめ』波木井やよい 国土社 1994
『読み聞かせこのすばらしい世界』ジム・トレリース訳 亀井より子 高文研 1986等を基にして論者なりにまとめた。
- 2) 足立幸子 「地域・家庭・学校の連携による読み聞かせ研究—読み聞かせボランティアの全国実態調査の分析から—」青少年教育フォーラム2004.3国立オリンピック社会青少年総合教育センター研究紀要題4号 独立行政法人国立オリンピック社会青少年総合センター
- 3) 有働玲子 「地域社会・家庭・学校における読み聞かせ運動について—東京都大田区を中心にして—」学術フロンティア推進事業 平成16年度 研究成果報告書 第2部門 少子社会における子どものための地域活動の展開 聖徳大学 生涯学習研究所2005年3月31日 P.86～P.106